The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	助数詞「機」の成立
Author(s)	伊藤, 由貴
Citation	語文. 2015, 104, p. 85-99
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70966
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

助数詞「機」の成立

伊　藤　由　貴

1　はじめに

助数詞に関しては多くの先行研究があるが助数詞の定義に関しては，未だ定まったものはない。先行研究でどのようなものを助数詞と認定しているかを見ると，「独立して用いることができない（飯田1999：７）」といった条件で名詞と同形のものとそうでない助数詞を区別しようとする傾向がある。しかし，成田（1990）や田中（2012），東条（2014）などでは，名詞と助数詞は連続的なものであることが指摘されると同時に，名詞から助数詞へと通時的な変化をとげた助数詞の存在が示唆されている。

本稿で取り上げる「機」は先行研究でも扱われることのある助数詞であるが，現代語の助数詞として問題なく認定されていることが多い。しかし，明らかに「飛行機」という名詞との関連がうかがわれる助数詞であり，成田（1990：８）では「名詞から助数詞ができるというプロセスが存在することを暗示」する助数詞の１つとして「機」を挙げている。

本稿では，助数詞「機」がどのように使用されてきたのかを通時的に観察し，助数詞がどのように成立するかの一端を明らかにすることを目指す。その上で助数詞と名詞の分類について考察を加えたい。

本稿の構成は次の通りである。２節で先行研究についてまとめ，３節では明治以降の新聞における「機」の用例を中心に助数詞「機」の成立について考察する。４節では「機」以外にも名詞から生成された助数詞が存在する可能性について述べ，５節では助数詞の分類基準について言及する。６節はまとめである。

なお，本稿では「３人」「４個」の「３」「４」の部分を「基数詞」，「人」「個」の部分を「助数詞」，基数詞と助数詞が合わさったものを「数詞」と呼ぶ。

2　先行研究

2・1　助数詞の分類

現在，どのようなものを助数詞として認定するかということに関しては定まった

ものがない。基数詞につくものをすべて助数詞とみなす先行研究もあるが，実際は次のように名詞がついていると感じられる用例も少なくない。

⑴　雨のため4試合が中止となり，32大会で計266試合（不戦勝1試合含む）があった。　（2014年7月17日）[1]

⑵　飲酒運転摘発で検知管すり替え　4警官，証拠偽造容疑　（2014年7月19日）

そのため，名詞と助数詞を区別する何らかの基準が必要になるが，その基準は先行研究によって様々である。松本（1991）では類別詞という用語を用いて，次のような基準を設定している[2]。

⑶　1）数詞（和語系：のヒト，フタ，ミ…及び漢語系のイチ，ニ，サン…）の後に付けられる。

2）数えられている事物を示す名詞（クルマなど）と共起しうる。

3）個別化された事物の数を示す際に使われる。　（松本1991：82）

このような基準のもと，注の中で「「ふたシーズン」と言う時のシーズンなどの名詞は2の条件を満たさないので類別詞とは見なさない」とし，助数詞のように使われる名詞と助数詞を区別しようとしていることがうかがえる。

飯田（1999）では助数詞を「数詞に直接付くもの」とした上で，単位を示すものと示さないものに分類し，更に，単位を示さないものを独立して使用できるか否かで分類している。そして，単位を示さず，独立して使用できないものを狭義の助数詞とする。

しかし一方で，名詞と助数詞は連続的なものであるということも度々指摘される[3]。成田（1990）は名詞と同形の助数詞に着目し，意味・語種・統辞論的性質から考察を加え，「原理的には，名詞はすべて潜在的に助数詞として使われる可能性を持っているのではないか」という仮説を提示する[4]。

田中（2012）は，名詞も基数詞の直後にくることができる，という前提のもと，「副詞的位置にくるか」「数詞と直結できるか」「独立性があるか」「「両」を付加することができるか」という観点から【表1】のように分類し，A～Cを助数詞，Dを名詞とする。そして，「BやCに属する語の一部は比較的若い助数詞であると考

【表1】名詞と助数詞の連続性

	形態素（例）	副詞的位置	数詞直結	独立性	「両」付加
A	-人、-匹、-個	○	○	×	×
B	粒、箱、種類	○	○	○	×
C	試合、店舗	○	○	○	○
D	社長、都市	×	○	○	○

えられる」としている。　（田中2012：125）

また，東条（2014）は基数詞に付くものを次のように分類する。

⑷　助数詞　　＝単独で使用できないもの
　名詞型助数詞＝単独で使用できるもの
　　├容器型助数詞　＝容器となる名詞を基準に量を測るもの
　　└非容器型助数詞＝名詞の性質を残すもの
　　　├準助数詞　＝可付番性[5]のあるもの
　　　└擬似助数詞＝可付番性のないもの　（東条2014に基づく）

以上の分類の内，擬似助数詞は「助数詞の形を模した名詞」（東条2014：27）とされるため，可付番性によって助数詞と名詞を区別していると見られる。

また，成田（1990），田中（2012），東条（2014）は現代語を対象とした共時的研究であるが，いずれも名詞が助数詞になるという通時的変化が念頭に置かれている。

このように先行研究において，名詞から助数詞が成立するということがたびたび示唆されるものの，実例を示したものはほとんどない[6]。名詞から助数詞が成立することを示すことは，助数詞がどのようにして生成されるのかという通時的問題のみならず，どのようなものを助数詞として認定するのかという共時的な問題にもつながり，助数詞の全体像を明らかにする上での一助となると考える。

２・２　助数詞の認定基準

名詞から助数詞が成立することを確認するには，助数詞を認定する基準が必要となる。先行研究で名詞と助数詞を区別するためにどのような基準が設けられているかをまとめると次のようになる。

⑸　● 数えられている事物を示す名詞と共起しうる（松本1991）
　　● 副詞的位置にくる（田中2012）
　　● 可付番性がある（東条2014）

松本（1991）の数えられている事物を示す名詞と共起できるという基準についてはDowning（1995）でも挙げられるが，それに対して田中（2012：121）では，⑹⑺の例を挙げ，名詞と直結可能な語のほとんどが数える事物と共起可能なため，この基準では名詞と助数詞とを明確に区別することはできないとする。

⑹　目の上のたんこぶをどうにもできない塚本ら３社長も非力だが，お上が民間企業の首脳人事に不明朗に介入することは，あってはならないことである。
　（ＡＥＲＡ　2010年５月31日：下線含め田中2012による）

⑺　全国ご当地カレーの作り手たちが22日，「華麗（カレー）なる感謝祭」と銘

打った催しを長崎県大村市など３地域で同時に開く。

（2011年１月21日：下線含め田中2012による）

副詞的位置にくるかどうかについては成田（1990）においても助数詞らしさを測る基準として用いられている。成田（1990）では数詞のあらわれる位置を次のようにまとめている。

⑻　イ．Ｑ＋格助詞　　３人が来た。

　　ロ　Ｑ＋の＋名詞　　３人の学生が来た。

　　ハ　名詞＋Ｑ＋格助詞　　学生３人が来た。

　　ニ　名詞＋格助詞＋Ｑ　　学生が３人来た。　　（成田1990：３－４）

このうちのニが副詞的用法であるが，成田（1990：98）では数詞の「名詞と最も異なる特徴は，ニの副詞的用法を持つことにある。」としている。ただし，田中（2012）では，副詞と共起できるかどうかで名詞か助数詞かを二値的に分けることができるとしているが，成田（1990）では文脈によって不自然さが変化することを指摘しており[7]，完全に二値的に分けられるかどうかは疑問が残る。

東条（2014）の可付番性に関しても助数詞性を測る上で１つの基準とすることは可能であろう。しかし，不定の数に「幾」を用いるか「何」を用いるかといった問題や本稿で主な調査対象とする新聞に不定の数が出にくいこともあり，本稿で判断基準として用いるのは難しい[8]。東条（2014）では，可付番性の有無と副詞的位置への生起の可否はほぼ対応しているとしており，東条（2015）でも，準助数詞と擬似助数詞では用いられる構文に違いがあり，東条（2015）の中でＮＣＱ型と呼ばれる数詞が副詞の位置にくる構文では擬似助数詞が用いられないことを，データを示した上で指摘している[9]。

以上を踏まえると，副詞的位置のへの生起で二値的に助数詞か否かを分けることができるかどうかには疑問が残るものの，副詞的位置での用いやすさに差があることは確かであり，副詞的に用いることができるかどうかを，助数詞であるか名詞であるかを考える上での１つの基準とすることはできるだろう。本稿においてもこの基準を用いることとする。

２・２　助数詞「機」について

本稿では名詞が助数詞になったものとして「機」を取り上げる。現代語における助数詞「機」は松本（1991）では（３）の条件を全て満たすとされ，飯田（1999）でも狭義の助数詞に含められており，何ら問題なく助数詞として認定されていることが多い。東条（2014）の分類でも助数詞に入ると見られる[10]。

しかし「機」という助数詞は明らかに「飛行機」という名詞との関連がうかがえ，成田（1990）では助数詞「機」に関連して次のような指摘をしている。

⑼　名詞と同形という条件からははずれるが，訓読みならば普通名詞であるものが音読みで助数詞となる漢字や，漢語普通名詞の一部が助数詞として用いられるものがある。

⑿ａ．国／か国（こく），俵（ひょう），輪（りん），畳（じょう）

ｂ．社（会社），種（しゅるい），錠（じょうざい），機（飛行機），期（任期）

これらは，副詞的にも自由に用いられ，「たわらを３俵運ぶ。」「錠剤を３錠飲む。」のような例はごく自然である。音読みであったり，略して一字漢語となったりすると，助数詞らしくなるのである。このようなものの存在は，名詞から助数詞ができるというプロセスが存在することを暗示しているように思われるが，いかがであろうか。（成田1990：７－８）

ここでは助数詞「機」のような名詞の一部を用いた助数詞が，名詞から助数詞が成立するというプロセスを暗示しているとするが，具体的にどのようなプロセスであるかは述べられていない。

そこで飛行機を数える助数詞の調査を通じ，助数詞「機」がどのように成立したのかを考察することで，近代における助数詞の生成の一側面を明らかにすると共に，名詞から助数詞が成立する実例の１つとしたい。

３　助数詞「機」の成立

３・１　飛行機を数える助数詞の変遷

「機」の数える対象である飛行機は近代に発達した乗り物であるが，「機」はいつごろから使用されているのだろうか。また初期においてはどのように使用されているのだろうか。それを確かめるため，朝日新聞のデータベースである「聞蔵Ⅱビジュアル」[11]を用いて明治期は各年１年間，大正期以降は５年おきに半年分（１～６月）の飛行機に関する記事を検索し，記事における飛行機の数え方を調査した[12]。

その結果，近代において飛行機の数を表す場合，基数詞に何もつけない「基数詞＋φ」，基数詞に名詞をつける「基数詞＋名詞」，名詞に助数詞をつける「基数詞＋助数詞」の３通りの表現が見られた。以下に「基数詞＋φ」と「基数詞＋名詞」の具体例を挙げる。

【基数詞＋φ】

⑽　七日より当地に飛行機大会を催さる既に到着したる飛行機数16に及び今明日中に更に東部より多数の参加者ある筈，［…］　（1911年１月11日）

⑾　二三の独逸飛行機は仏国ダンケルクに爆弾を投下し即死15名負傷者35名を生ぜしめたり　（1915年１月２日）

【基数詞＋名詞】

⑿　隅なる観測台上には赤白旗翻飜として将に飛行試験の開始せらるべきを示し格納庫前にはライト及グラーデの二飛行機引き出され飛行服に身を固めたる日野大尉が之を点検する［…］　（1911年４月８日）

⒀　昨夜一独逸飛行機は英国ケント州フエーヴシヤム（倫敦を距る五十二哩）及びシツチングボーン（倫敦を距る四十五哩）の両市に爆弾を投下したり　（1915年４月18日）

⒁　四時を過ぐる頃当日の飛揚に充つべきフアルマン式第二号，第八号，第十七号の三複葉飛行機を格納庫より曳出し滑走台脇に於て綿密なる機の点検を行ひ長時間の飛行に堪へ得る為約二百リットルの瓦素林油を填充す　（1915年５月27日）

２・１節において基数詞に付くものは全て助数詞と見る立場があることを述べたが，⒀や⒁において「独逸飛行機」や「複葉飛行機」を１つの助数詞と見るのは無理があるだろう。したがって，本稿では基数詞に直接名詞が付くことができるという立場をとる。

以上を踏まえ，近代以降，飛行機がどのような数え方をされてきたのかを整理したい。

明治期においては次の【表２】のような結果となった。

【表２】明治期の新聞における飛行機の数え方

	つ	個	隻	台	機	φ	飛行機(13)	機械	計
1909	1	6	3		1	1			12
1910		4	7						11
1911		19	6	5	1	4	5	1	41

【表２】において助数詞が用いられる場合の傾向を見ると，まず「個」や「隻」が使われ，その次に「台」が使われ始めたことがわかる。「機」も用例は見られるがわずかである。

次に大正期以降の数え方を５年おきに調査したものが【表３】である。

これを見ると，「個」や「隻」は次第に使われなくなってゆき，「台」と「機」が主

【表３】大正期以降の新聞における飛行機の数え方

	つ	個	隻	台	機	φ	飛行機	機械	計
1915		3	18	26	7	1	8		63
1920			3	22	20	4	2		51
1925				32	22	1	1		56
1930	1			9	5		2		17
1935				20	13				33
1940				14	13	1			28
1945				1	22				23
1950					2				2
1955				1	6	1			8
1960					3				3

なものとなっていくことがわかる。「機」は1920年代からその使用率が増えている。

３・２　名詞から助数詞へ

３・２・１　初期における「基数詞＋機」

前述したように「機」は飛行機が話題に上り始めた初期の段階から用例が見られるが，その数は少ない。初期の例は以下のようなものである。

⑮　［…］中にもアデール氏の飛行機は最初の試験（一八八二）が存外に成績の好かつた為一時仏国陸軍の補助迄受たが其後之に改良を加へて出来た第二の機械が失敗に帰して全く世人の信用を失ひ九十年に至つて陸軍の補助も止められて終つた又タタンの飛行機はペノーの学理を其侭応用して作つたものであつたが之は最初から失敗に終つた，［…］是等は凡てまだ適当な動力を機に応用するとのしられぬ時だから何れも人力を以て機を動かし空気の抵抗で飛び上らんと企てたものである／人力を動力とした此種の飛行機中で最も成功したものは独逸のリヽエンタール氏の其である，氏は廿年間推理と実験とで研究を密にし終に一機を完成した　（1909年10月１日）

⑯　偖此等数々の様式中仏国ではフアルマン複葉及びブレリオ単葉の二機一般に良好と認められ［…］　（1911年４月23日）

ここで注目したいのは，⑮で飛行機のことを「機械」「機」と表現している点である。現在「機」は単独では使用しにくいが，近代の用例を見ると「機」のみで使用されている例は多く見られ，「機」が単独で名詞として機能していることがわかる(14)。以下に「機」が単独で用いられている例を示す。

⑰　然るに水雷艇が救助に行つて見るとラタムは半水中に沈める機の一隅に腰を掛け平気の平左で煙草を吹かしてゐたと云ふ　（1909年10月15日）

⑱　発動機はホールスカツト五十一馬力にして機の速度は四十八哩なり　（1911年４月１日）

⑲　氏は七十馬力にて研究したるも購入の機は百馬力なり　（1913年12月９日）

このような機械をあらわす名詞「機」の存在を考慮すると，初期における「基数詞＋機」の例は「基数詞＋名詞」と分析でき，次のような表現と同様の意味で用いられていたと考えられる。

⑳　夫で兎も角第一番に飛行機を造つたのはセルフリツヂ中尉だつたが此は不幸にして成功せなかつた［…］次でキヤプテン，ボールドウインも一機械を造つて此は稍成功したが前二者の長所を取つて最後に発明したカーチス氏の機械が最も優秀であつた　（1911年４月27日）

また，「機」は機械を意味しているため，「基数詞＋機」は次のように飛行機以外の機械にも用いられることがあった。

㉑　長崎県下大瀬崎無線電信局に於ては従来五キロワット一機のみ備え付けありしを去る三月末拡張工事完成の結果七キロ並に二十五キロワットの二機に改められ普通は七キロワットを用い遠距離若くは暴風雨等の場合には特に二十五キロワットを使用する事となれるが［…］　（1915年８月31日）

３・２・２　助数詞としての「機」

では，「機」はいつごろから助数詞として使用されていると言えるだろうか。以下は各年の用例であるが一見しただけでは名詞か助数詞かの判別はできない。

㉒　五日の飛行者加藤田中能美足立の４中尉が十五，十六，十七，十八号の四機に分乗して午前九時から約十分間位宛の小手調を行つた後は［…］　（1915年４月５日）

㉓　右は阿弗利加縦断競争に参加せる六機即ちタイムス，デーリー，テレグラフ，英国空軍各一台南亜二台中のものなり　（1920年３月７日）

㉔　米国海軍省は爆撃及偵察兼用の飛行機四十機を新造すべく百万弗の註文契約をなしたる旨を確認した　（1925年１月16日）

㉕　空には飛行機　晴れの妙技　都人の目を空に吸よせて，入乱れた六十八機　（1930年３月11日）

㉖　四班に分かれた一行は［…］空輸会社の旅客機スーパー・ユニヴアーサル二機に分乗（操縦士は小川，鳥居両飛行士）して夜の帝都と横浜との上空視察に向

つたが［…］　（1935年６月26日）

㉗　［…］所轄不明の飛行機が一機墜落燃えてゐるのを附近の昭和セメント会社の従業員が発見，［…］　（1940年１月27日）

㉘　それらの実情を検討して一機でも余計生産の実を挙げて行くことに全力を注がねばならぬと考へてゐる　（1945年１月24日）

そこで，本稿では２・２節で述べたように副詞的用法を基準とし，助数詞として用いられていたかどうかを判断する。「基数詞＋機」という表現の副詞的用法がいつごろから見られるかに着目すると，確例では㉙のような用例が1920年代に確認できた。また，飛行機ではない機械を数える場合でも近い時期に㉚のような副詞的用法が確認できる。

㉙　お隣の中華民国にはヴヰツカースの七百馬力の飛行機が二百機輸入された　（1923年１月11日）

㉚　東京板紙会社にては昨年九月よりヤンキーマシン九十六吋を一機増設し本年一月より全能力を発揮し始めたれば［…］　（中外商業新報 1918年４月９日）

このことから，1920年前後には「機」が基数詞と複合することで数詞を形成し，「機」が助数詞として機能していたと判断できる。【表３】では1920年代ごろから用例の割合が増えたことが見てとれたが，助数詞「機」が成立したと見られる時期と近く，前後関係を確定することはできないものの，何らかの関連が想定される[15]。

この当時の「機」は飛行機のみならず機械にも使用されている例が見えることから，飛行機を含む機械全般に使用可能であったと見られるが，「機」は次第に飛行機のみを数える助数詞となっていった。そこには飛行機を意味する「機」の定着が一因としてあったのではないだろうか。飛行機が紙面に登場するようになってまもなく，「機体」「機翼」「機影」といった語が見られるようになるが[16]，これらの「機」は飛行機を指していると考えられる。また，⑰～⑲のように本文中に一字漢語名詞「機」が用いられる場合，それが機械と飛行機どちらを意味するのかを判断することは難しいが，1920年代には飛行機に関する記事の見出し文に名詞「機」が用いられる例も見られ[17]，「機」だけで飛行機を意味する用法も定着しつつあったことがうかがえる[18]。飛行機を表す「機」の定着と共に，助数詞「機」も飛行機を数えるものであると認識された可能性が考えられる。

このように，飛行機を数える助数詞「機」は，名詞「機」から機械を数える助数詞「機」ができ，それが次第に飛行機のみを数えるようになることで成立したものと見られる。

4　名詞からの助数詞の生成

以上，助数詞「機」の成立について見てきた。初期の用例が「基数詞＋名詞」と分析できることを述べたが，初期の「機」のように「基数詞＋一字漢語名詞」で数を表す方法は近代ではよく見られるものである[19]。

成田（1990：４）において「中国語の古典語では，数詞は，もともと「九牛一毛」「一石二鳥」などのように，名詞に前接する条件のもとに，名詞と結合して複合名詞をつくる（現代語では，量詞―日本語の助数詞に当たる―を介するのがふつうのようである）。」と述べられるように，漢語の一造語法として，このような表現がよく見られたのだろう。

成田（1990：７）では「機」について述べる際，「名詞と同形という条件からははずれるが」と前置きしているが，実は「機」が使われ始めた当時は名詞と同形という条件を満たしていたことは先に述べたとおりである。このように現在，単独で名詞として機能していなくとも元々は名詞から成立した助数詞は他にも存在すると思われる。特に，近代以前は今現在あまり使われない一字漢語名詞が多く存在し，成田（1990）で，音読みにしたり略して一字漢語になったりして助数詞らしくなった例として挙げられている中の「俵」，「輪」，「社」，「種」，「錠」，「期」は『日本国語大辞典』（第２版）を参照すると単独で名詞として使用した例が載せられている。これらの助数詞が実際のところどのようにして成立したかは個々に検討する必要があるが，「基数詞＋名詞」の表現から「基数詞＋助数詞」となっていったものは本稿で取り上げた「機」以外にも存在すると考えられ，助数詞の造られ方の１つのパターンであるといえるだろう[20]。

5　助数詞の認定と分類

２節で見たように，これまで助数詞の分類に関してはいくつかの基準が提案されてきた。飯田（1999）や田中（2012），東条（2014）では最も典型的なものを分類するために「単独で使用できない」という基準を設定している。

確かによく使用される助数詞に単独で使用できないものが多いということは言えるだろう。しかし，単独で使用できるか否かで分類することにはどこまでの意味があるだろうか。助数詞には中国語の量詞を源流とするものがあることは知られているが，量詞に由来すると見られる助数詞は単独で使用できないものが多い[21]。しかし，日本で生まれた助数詞はどうだろうか。本稿で取り上げた「機」は先行研究のどの基準でも最も典型的な助数詞として認定されうるが，同じ一字漢語名詞から

成立した助数詞でも，現在もその名詞が単独で使用できれば，「機」とは異なる分類となる。しかし，その分類の違いは現在単独で名詞として使用されているか否かの違いで，助数詞としての性質の違いではない。もちろんこれは一字漢語のみならず，他の名詞でも同じことが言える。つまり，助数詞の分類において単独で使用できるか否かという観点は本質的なものではないのである。本稿で見てきた「機」のような助数詞の存在は，助数詞の分類を考える上での１つの材料となるのではないだろうか。

6　まとめ

以上，本稿で述べたことをまとめると次の通りである。

- 近代においては「機」が単独で機械を意味する名詞として機能していた。そのため，初期の用例は「基数詞＋名詞」と分析できる。基数詞と複合して副詞的用法を持つことを助数詞として使用されているかどうかの基準とすると，1920年前後には「機」が助数詞として使用されていたと考えることができる。
- 「基数詞＋名詞」は漢語において自然な造語法であり，近代においてはよく見られる表現である。現在単独で名詞として使用されていなくとも元々は名詞から生成された助数詞は他にも存在するとみられ，「基数詞＋名詞」という表現から助数詞ができるのは助数詞の造られ方の１つのパターンであると考えられる。
- 先行研究では助数詞を分類する際，単独で使用できるか否かが基準の１つとなることがあるが，名詞由来の助数詞の場合，単独使用の可否は名詞自体の問題であり，助数詞の本質的な観点とは言えない。

参考文献

飯田朝子（1999）『日本語主要助数詞の意味と用法』東京大学大学院博士学位論文

――――（2004）『数え方の辞典』小学館

阪倉篤義（1966）『語構成の研究』角川書店

田中佑　（2012）「日本語助数詞の範囲―名詞と助数詞の連続性―」『筑波応用言語学研究』19　筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース　pp.117-126

―――　（2013）「助数詞「-店」の成立に関する言語的・社会的要因」『日本語学会2013年度秋季大会予稿集』　pp.109-116

東条佳奈（2014）「名詞型助数詞の類型―助数詞・準助数詞・擬似助数詞―」『日本語の研究』第10巻４号 pp.16-31

――――（2015）「名詞型助数詞の構文と傾向」『待兼山論叢』第48号日本学編 pp.83-99

成田徹男（1990）「名詞と同形の助数詞」『都大論究』27　東京都立大学国語国文学会 pp.1-8

松本曜　(1991)「日本語類別詞の意味構造と体系―原型意味論による分析―」『言語研究』99　pp.82-105
―――　(2014)「類別詞」『日本語文法事典』大修館書店　pp.672-673
峰岸明　(1966)「平安時代の助数詞に関する一考察（一）」『東洋大学紀要　文学部篇』20　pp.49-81
Downing, Pamela (1995) *Numeral classifier systems: the case of Japanese* Amsterdam; Philadelphia, John Benjamins Publishing.

使用資料

朝日新聞…「聞蔵Ⅱビジュアル」【http://database.asahi.com/library2/】，地底戦車の怪人…『太平洋魔城』（海野十三全集，三一書房），中外商業新報…「神戸大学附属図書館デジタルアーカイブス新聞記事文庫」【http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/】，旅客飛行機…「CD-ROM 版　赤い鳥」第11巻第６号（大空社），読売新聞…「ヨミダス歴史館」【https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/】，万朝報…「神戸大学附属図書館デジタルアーカイブス新聞記事文庫」【http://www.lib.kobe-u.ac.jp/sinbun/】

注

（１）　日付だけの用例は全て朝日新聞からの用例である。

（２）　松本（2014）では助数詞は単位名を含むことが多いのに対し，類別詞は単位を含まないのが普通であると説明している。

（３）　ここでは現代語に関する記述をまとめたが，上代語の助数詞に言及した阪倉（1966）や平安時代の助数詞についての論考である峰岸（1966）でも名詞と助数詞の境界は明瞭ではないという指摘がなされている。

（４）　ただし，成田（1990：２）では「大学，病院，百貨店［…］」のようなものから「さら，はこ，たる，［…］」，「かけら，つぶ，たば」のようなものまで全て「名詞と同形の助数詞」として括られており，基数詞につくものはすべて助数詞と考えていると見られる。その点においては，飯田（1999）と共通している。

（５）　東条（2014）によると可付番性とは，前接する数を制限しない性質で，その性質の有無は「何」を付して自然であるかどうかで判断している。「何」がついて自然なものは可付番性があり，不自然なものは可付番性がないという判断である。

（６）　田中（2013）では「店舗」が名詞から成立した助数詞であるとしているが，「店舗」を助数詞とするかどうかは見解の分かれるところである。

（７）　具体的には次のような作例が挙げられている。

（ア）*a.　ことし，大学が３大学できた。
　　?b.　ことし，特色ある大学が３大学できた。
　　c.　ことし，そのようなところが３大学できた。　（成田1990：４）

そして「多くの助数詞ではふつうであるはずのａのような文は，はなはだ不自然であり，ｂでも抵抗のある人もいよう。ｃのように「大学」という名詞がないと，かなり自然になる。」と述べている。

これに対し，田中（2012：122）は注の中で，冗長性で文の許容度が変化する可能性があることを認めた上で，「練習試合を３試合こなした」のように冗長であるにも関わらず日本語として許容されることの方が重要であると述べる。

しかし，田中（2012）において名詞であるＤの分類に挙げられている「都市」であっても次のような用例があり，修飾する語がついているとかなり自然な表現となると考えられる。

（イ）各都市の生活環境の総合評価は，中枢都市，中核都市，地方拠点都市１，地方拠点都市２と，都市規模の順になった。／しかし，個別指標ごとにみると，６指標のうち，医師数や交通事故件数などからなる「安心度」と「住宅」では，地方拠点都市が中枢・中核都市より高い評価だった。［…］都市ごとのランキングでも，上位10位までのうち，地方拠点都市が６都市入っている。

（1993年１月26日）

また，成田（1990）が挙げる「大学」の例でも次のような表現が見られる。

（ウ）［…］臨床実習は，医学部５年目から始まるが，全国医学部長病院長会議の07年度の調査では，2250時間以上行っている大学が７大学ある一方，1500時間に満たない大学が27大学あるなど，大学によってばらつきがあった。［…］

（読売新聞2009年４月14日）

これらの例を見ると，「地方拠点」「2250時間以上行っている」「1500時間に満たない」というように修飾する語が付くことで「大学」や「都市」の範囲を限定している場合は同じ語を繰り返すことになっても自然な表現になると考えられる。このことを踏まえて，田中（2012）で挙げられた例を見ると「試合」の範囲を限定する「練習」という語がついており，やはり，文脈によって許容度が変わるという成田（1990）の指摘は見逃せないだろう。また，この傾向は松本（1991：82）で基準の１つとされた「数えられている事物を示す名詞（クルマなど）と共起しうる。」という点に関しても同じことが言えると考えられ，共起できるか否かは文脈によるところも大きいと見られる。

（８）「何機」の例は管見の限りでは以下のものが最も古い。

（エ）「おお，お前はピート一等兵だな。それはでかした。何機撃墜したか」

（地底戦車の怪人〔1940〕）

また，「幾」を「何」と同様に捉えることが可能かどうかは検討が必要であるが「幾機」の例として次のようなものが見られた。ただし，これは飛行機ではなく紡績機を数えている例である。

（オ）製糸業に従事してゐる三間半に廿余間の長細い幾機かの製糸場には左右両端に糸採り釜を据ゑて二列となり工女は尻合せに腰掛けて沸立った繭を紡いでは糸を手繰るに余念がない　（万朝報1919年７月21日）

（９）東条（2015）ではＮノＱＣ型についても擬似助数詞には見られない構文であることを指摘している。

（10）田中（2012）の分類に従うと「機」は独立して用いることができないにも関わらず，「両機」のような表現が可能なため，Ａ～Ｄのどれにも分類することができない。

（11）朝日新聞のデータベースである「聞蔵Ⅱビジュアル」には「朝日新聞縮刷版1879～1989」の新聞記事が収録されており，その記事は，見出しと記事ごとに登録された複数のキーワードから検索することができる。検索結果からは縮刷版の本文画像を閲覧することができるようになっている。

（12）具体的には「飛行器」「飛行機」「航空機」「旅客機」という語で，記事に登録されたキーワード及び見出し文を検索し，ヒットした記事の本文を参照し，飛行機がどの

ように数えられているかを調査した。用例は記事単位で数え，１つの記事の中で飛行機に対して複数の助数詞が使用されている場合，それぞれを１例としてカウントした。また，検索にかかっても「ライト式軽気球五十箇」「十二隻の気球船」のように明らかに気球や飛行船を数えていると判断される例も用例数から除いた。ただし，現在は「飛行機」と「飛行船」は区別されるが，初期（特に明治期）の段階では飛行船も「飛行機（器）」と呼ぶことがあり，【表２】【表３】の結果の中には「飛行船」の用例が含まれている可能性が残る。逆に飛行機を軽気球と呼ぶような例もあるが，軽気球と呼ばれている飛行機の例を判別するのは困難であったため，今回は「飛行機」と呼ばれるもののみを用例カウントの対象とした。

(13)　この項目には基数詞に直接数える対象となる名詞が付いている例をカウントしている。従って，用例数の中には「三飛行機」のような例の他，「１独飛行機」「２練習機」といった例も含まれる。

(14)　『日本国語大辞典』（第２版）においても「機」の単独での用例が示されており，次のように書かれている。

（カ）き　【機】【一】〔名〕（１）機械。装置。からくり。＊太平記〔14Ｃ後〕二〇・義貞自害事「千鈞の弩は鼷鼠の為に機（キ）を発せず」＊米欧回覧実記〔1877〕〈久米邦武〉一・三「顔を洗ふに水盤ありて，機を弛むれば，清水迸り出づ」［…］（10）「ひこうき（飛行機）」の略。＊崑崙山の人々〔1950〕〈飯沢匡〉「エンジンに引火して機は燃えてしまひました」＊ある隷属国の悲劇〔1955〕〈中野好夫〉「機は一万数千フィートから二万フィートを越えるピークの間を縫って飛ぶのである」＊死者の遺したもの〔1970〕〈李恢成〉「機は大地をはなれ，空を噛むように急上昇していた」

(15)　1920年代は「機」の用例数が伸びた年代でもあるが，この時代の「台」は自動車や機関車等にも使用されており，一見して他の乗り物と区別できる助数詞が必要とされ，「機」が助数詞として使用されるようになったと見ることもできるだろう。

(16)　次のような用例が見られるようになる。

（キ）其侭発動機を止め盲滅法に桑畑の中に降下し滑走したれば機体は桑の木に触れて夥しく破損し両将校は僅か許りの擦過傷を負ひたり　（1912年11月３日）

（ク）飛行機体目撃防止△機翼を被覆する新織物　（1913年８月11日）

（ケ）午後３時15分に至り北方高槻付近の高空雲間に当り機影微かに見ゆ　（1915年２月27日）

(17)　次のような見出し文の記事がある。

（コ）御自慢の機を携えて　（1923年５月３日）

(18)　このように「機」で「飛行機」を表す用法は新聞以外にも見られ，次のような児童向けの文章にも用例が見られるなど，広く用いられたようである。

（サ）気が付いて見ると機はいつか海の上に出てゐました。朝の太陽を受けた海は，とろけるやうなコバルト色に霞んで，これはまたまるで夢を見てゐるやうな気持ちでした。　（旅客飛行機〔1936〕）

(19)　例を以下に示す。（シ）ａは単独で名詞として使用される例，（シ）ｂは基数詞と複合して使用される例である。（ス）は同じ記事の中で，名詞として使用される例と基数詞として使用される例が見られるものである。

（シ）ａ此時に至り艦は艫の方より漸次海中に没しかゝるものから［…］

（1904年６月４日）

b 斯くて我水雷挺隊は敵の二艦に対し素破といはゞ直に水雷を発射して［…］

（1904年２月16日）

（ス）大正博の四館　取々の趣向設計

［…］美術館に就いて王供技師の談に依ると『［…］換気法と云つては掃除をよくする外に道は無いが他の館と違つて絵画が大部分を占て居るから面積は割合に広くさう心配する事もなからうと思ふ［…］』（1913年12月５日）

(20)　ここでは一字漢語名詞から助数詞となった可能性があるものとして列挙したが，和語助数詞として存在したものが音読みにされるようになった等，他の可能性も存在する。

(21)　ただし，量詞由来の助数詞でも章段を数える「回」や，事柄を数える「件」は多少独立性が高いと見ることもできる。

（いとう・ゆき　本学大学院博士後期課程修了）